

バルカンのムスリム

新城高校 澤野 理

一、はじめに

わが国において「ムスリム」という用語は、「イスラーム教徒」一般を指すものとされてきたが、一九九〇年代のボスニア内戦以降、特定の「民族」を指す用語（この場合、わが国では「ムスリム人」と表記されることが多く、本稿でもこの用例に従う）としても認識されるようになってきた。しかしながら、高校世界史において（少なくとも教科書レベルでは）ムスリム人のことは、現代史上の諸問題を扱う部分で簡単に触れられている程度で、彼らがいつ、どのようにしてバルカンに現れたかということについては、ほとんど述べられていない。世界史を教えたことのある者なら、ヨーロッパ世界（キリスト教世界）の一部であるバルカンにイスラーム教徒が現れるのは、一四世紀半ばにこの地に進出したオスマン帝国の影響であるとの想像はできようが、具体的な改宗の様子などについては知られていない。また、研究史をひもといてみても、扱う史料の言語の問題、すなわち複数のしかも系統の異なる言語に通じていなければならぬことから、バルカンのムスリムに関する研究はこの地域の他分野の研究に比べてそれほど多くない。

本稿は、この問題に関する情報提供を目的として、バルカンにおけるイスラーム化の過程および現代におけるムスリムの状況を両者とも概略ではあるが、提示したものである。

二、バルカンとは

バルカン（半島）という語の指す領域は、一般にアドリア海に面したイストリア半島からドラヴァ川、ドナウ川を経て黒海に至る線より南の地域とされ、これに歴史的・文化的連続性からルーマニア（トランシルヴァニアを除く）を加えることもある。ここで、「一般に」としたのは、第一にイタリア半島やイベリア半島のような外部世界との明確な境界線が存在しないためである。また、それゆえ、多くの民族が流入して多様な文化世界を形成してきたという歴史的な状況も、バルカンを一つにまとめた地域として捉えることを困難にしている。こうした問題は、わが国でも戦前から認識されていた。たとえば、外交官としてイスタンブルに駐在していた経験のある芦田均は、一九三九年に彼の著書『バルカン』の中で次のように述べている。

同じ半島と云つても、イタリアにはアルプスの連山があり、スペインにはピレネー山脈があつて、明瞭に大陸との境を為しているが、バルカン半島と欧州との間には、何一つ自然の境界がない。欧州の境界ばかりでなく、アジアとの区画は、文字通り一葦帯水（ママ）のダーダネルスとボスポルス（ママ）海峡であつて、試みにスタンブール（ママ）九丘の上に立つて『おお』と呼べば、対岸のアジアは『おお』と答えん許りの距離に在る。

それ故に北から来る欧州人種も、東南からするアジア人も、何の苦勞もなくバルカンに入ることが出来た。バルカンの住民は、強力な侵入者の意のままに、或は押され、或は引き倒されて、その度毎に被征服民族の苦勞を嘗めて来たのである。〈中略〉

その上にバルカンの自然は地形的にも中心を造っていないから、況んや政治的に適当な中心の出来よう筈がない。よって彼らは地方的に割拠し、社会的に孤立し、その上に交通の不便が世界文運の進歩に恵まれることを阻み、かくして欧州文明に取残されて今日に至ったのである。(三三四頁)

かように統一の無い形であるから地理的に中心となるべき場所もなく、従って未だ嘗てバルカンを統一した大国が成立した前例がない。半島の到る処に小民族が割拠して互に相争う結果となった。これらの民族は昔から、危険が迫れば山奥に遁れ、危険が去れば平野に下りて互に沃野の分割を争った。(中略)

斯くの如くバルカンの地形が自然の中心点を欠き、而も周囲の地域から孤立し、その交通の大道が南北に斜に貫通する線であったことは、民族の形成にも歴史の方向にも多大の影響を与えた。バルカン半島が久しい以前から人種宗教の争いを繰返し、而も不_断に外敵の侵入を受けたのは専ら地理的条件の影響である。(中略)バルカン民族がいづれも独立不羈の争鬪性を有し互に融和を欠いているのはその長所と短所と共に自然の影響によるものと云って大過はないであろう。(一六一―一八頁)

(原文は旧字旧仮名、傍点は引用者による)

ところで、「バルカン」という語は、もともと「樹木に覆われた山・山脈」を意味するオスマン(トルコ)語の *Balkan* であり、オスマン帝国では、ウングルス・バルカン(現在のカルパチア山脈)などの用例にみられるように「○○山脈」という意味で用いられた。地域の呼称としては、古代ローマ期以来のトラキア・マケドニア・

アカイアや、オスマン帝国期のルメリなどがあつたが、これらはいずれもバルカン内の限定された一地域を指すものであつた。

バルカンという語が現在のような広い地域の呼称として提唱されたのは、ようやく一九世紀初頭に入ってからであり、一般化するのには、第一次世界大戦前後のことと考えられている。しかし、この時期のバルカンは、「ヨーロッパの火薬庫」と称されるほどの紛争多発地域であつたことから、自然とこの語には単なる地域概念を超えたマイナスのイメージが付加されていった。それゆえ、現代でもクロアチアやボスニアなどは、自国をいわゆるバルカン諸国の一つであることを否定している。その一方で、一九九七年一月にクレタ島でバルカン・サミットが開かれ、ギリシア・トルコ・アルバニア・ブルガリア・ルーマニア・新ユーゴ・マケドニアの七カ国が今後の連帯について協議を行うといった新しい動きもみられる。

三、オスマン帝国の進出とイスラーム化

オスマン帝国進出以前のバルカンの宗教は、主にギリシア正教であつたが、ドイツに近い地域ではカトリックも有力であり、ブルガリアのボゴミール派など異端の活動もみられた。また、ボスニアではボスニア教会という独自の教会組織が存在したことも知られているが、これについては後述する。

オスマン帝国のヨーロッパ進出は、一四世紀半ばにはじまり同世紀末にはドナウ川以南をほぼ征服した。この時点では、アルバニアやマケドニアを中心とした地域で、イスラームへの改宗が行われたと考えられる。また、現在のバルカンにおいて最もムスリムの多いボスニアにおける改宗は、一四六三年に同地がオスマン帝国支配下

に入つて以降のことと考えられる。ここで問題となるのは、改宗の動機や背景がどのようなものであつたかということである。世界史の授業でイスラームを扱う際に教える「イスラームは征服地の異教徒の信仰に対して寛容であり云々……」といったことやオスマン帝国の統治における「ミットレト」という概念などと照らしあわせると、少なくとも強制的な改宗ということは基本的に考えられない。改宗はオスマン帝国による征服から長い時間をかけて漸次的に進み、その動機も私的なものであつたようで、近年では研究者の間でもこうした考え方が一般的である。ここでいう私的な動機というのは、第一に法的・経済的な動機で、貢納義務の軽減や社会的上昇などを欲して改宗することがこれにあたる。貢納義務とは、授業でも必ず教える「ジズヤ」のことであるが、それ以外にも非ムスリムであることとの不利益が存在していたことがここから読みとれる。たとえば、オスマン帝国支配下のブルガリアでは、キリスト教徒は乗馬や武器の所持を禁止されたり、特定の服装を着用する義務があつたなどさまざまな制約があつた。こうした動機以外に、デヴシルメによる子弟の徴用を逃れるための方便としての改宗があつたようである。

それにしても、イスラーム勢力に支配された他のヨーロッパ諸地域に比べなぜバルカンだけで改宗が進んだのかという疑問は残る。従来、バルカンでは民間信仰や異教（たとえばマニ教など）的な慣習が強く残っていたため、イスラームを受容しやすかつたという説明がされてきた。この説に従えば、ボスニア教会という異端が存在したゆえにボスニアでは改宗者が多いということになる。しかし、アメリカのバルカン中世史家ジョン・V・A・ファインは、ボスニア教会を政治的な影響で生まれたカトリック教会内の分離派に過ぎ

なかつた——当然ボゴミール派との関連も否定される、との解釈を示している。ファインはまた、ボスニアにおける二つのキリスト教会、すなわちカトリック・ボスニア教会・（セルビア）正教会のいずれもが、同地において一度も指導的地位を獲得しなかつたことや、これら教会の民衆教化の程度がきわめて低かつたことも指摘している。このように、キリスト教の各宗派とも民衆に根付いていなかった社会的状況がボスニアにおけるイスラーム化を促進した、というのがファインの説であり、筆者もこの説の方が説得力があると思われる。

ただし、ボスニア以外のバルカン諸地域に関しては、ファインの説を準用できるかどうかは疑問が残る。というのは、ブルガリアにはボゴミール派という異端が、時代は若干ずれるものの、確かに存在していたし、ボスニア以外で現在でもムスリムの多いコソヴォやマケドニアが経済的に遅れた農村社会であることを考えると、民間信仰とイスラーム化の間に何らかの関連が見出せそうな気がするからである。この点については、今後の研究動向に期待したい。

四、共存から対立へ

オスマン帝国のバルカン支配の期間、ムスリムと非ムスリムの関係は、どのようなものであつたのか。両者の関係は、地域による微妙な相違はあるものの、一般に一六世紀末までは良好な共存関係にあつたようである。その要因として考えられるのは、前章でも指摘した、「イスラーム的寛容」——具体的にはズインミーやミットレトといった概念である。最近ではこれに加え、キリスト教側にも共存の要因があつたとする説が出ている。たとえば、東京都立大学の佐原

徹哉氏は『バルカン史』において次のように述べている。

キリスト教会はそもそも異教徒による支配を肯定する性格をもっている。福音書のイエスは「カエサルのもものはカエサルに返しなさい」と語り、異教徒への貢納を当然のこととしたのであつたし、聖パウロは地上の権力はすべて神の作つたものであると述べて、異教徒の支配を受け入れるよう勧めたのであつた。コンスタンティノーブルの陥落以前から、東方正教圏のほとんどがイスラーム勢力の支配下におかれ、数世紀にわたる共存の経験が積み重ねられていた。また、イスラームの側でも中東起源の一神教であるユダヤ教徒とキリスト教徒を「啓典の民」として貢納支払と一定の制限を受け入れる代わりに宗教活動の自由と共同体内部の自治を認めて保護するズインミー制の伝統をもつていた。そして、この二つが呼応して、イスラーム国家の下でキリスト教徒社会が共存する環境がはぐくまれたのであつた。

(一三〇―一三二頁、傍点は引用者による)

共存の要因としてもう一つ重要なのは、「パクス・オトマニカ」とよばれるオスマン帝国の政治的安定であつた。当時のバルカンにおいては、ティマール制とよばれる軍事封土制が施行されており、農民はこの制度の下で比較的安定した生活を保障されていた。といふのは、ティマールとよばれる封土は世襲を制限された国有地で、領主であるスイパーヒー(騎士)の徴税行為も中央政府によって一律に定められていたからである。

ところが、ティマール制は一六世紀後半から徐々に崩壊し、およ

そ一世紀をかけて帝国の地方統治制度は、イルティザームとよばれる徴税請負制に再編されていった。また、これにともないチフトリキとよばれる実質的な私的大土地所有も現れた。こうした変化は、一般の農民にとっては収奪の強化を意味し、大土地所有者であるムスリムと収奪されるキリスト教徒という対立の図式が成立することになった。さらに、一九世紀以降の近代ナショナリズムの昂揚と列強の思惑は、ギリシア独立戦争・露土戦争・第一次世界大戦など多くの紛争をもたらした。こうして、国家機構の再編にともなう混乱と外部勢力の圧力の中、両者の対立は一層深いものになっていった。そして、第二次世界大戦後は、旧ユーゴスラヴィアを除く社会主義政権下で進められた同化政策や体制転換後のナショナリズムが両者の共存を今日でも妨げているのである。

五、バルカンのムスリム

現在、バルカンに居住しているムスリムは、次のように地域ごとに異なる呼称を持っており、日常生活や言語、また各地域における政治的・社会的地位など多くの点において差異がみられる。

1. ムスリム人

セルボ・クロアチア語を母語とし、主にボスニア・ヘルツェグヴィナに居住しているスラヴ系ムスリムで、人口は約二〇〇万人。一九世紀まではトルコ人というアイデンティティを持っていたが、これは宗教的な帰属をもとにした意識で、いわゆる「民族」としての意識ではなかった。民族としてのムスリム人という概念は、オスマン帝国崩壊後、より正確には第二次世界大戦後、キリスト教徒であるセルビア人とクロアチア人に対抗する概念として誕生したも

ので、一九七一年の人口調査（国勢調査）から正式に用いられた。ただし、当時のユーゴ共産党は、ムスリム人とイスラームという宗教的帰属とは全く関係がないという見解を持っていた。この見解に従うなら、「ボスニア人」という呼称も成立しそうであるが、本稿では、筆者の力量不足もありこの問題には立ち入らないこととする。

ムスリム人は、一九九〇年代に入るまで、非常に世俗的な要素が強かったことで知られている。たとえば、金曜礼拝など定期的な礼拝の習慣はなかったし、豚肉食や飲酒などの宗教的禁忌に対しても寛容であったという。その理由としては、社会主義時代の世俗教育の進展や非同盟諸国外交におけるムスリム人エリート活躍を通じて、彼らの間に西欧的価値観が広まっていたことが考えられる。こうした状況を変化させたのが、ボスニア内戦であった。というのは、内戦の過程でイスラーム諸国の支援に期待した聖職者たちがイスラーム的規範の復活を唱え、彼らの社会的影響力が拡大したためである。サライエヴォで一九九四年の秋に起こった豚肉消失事件は、こうした状況を最も反映した事件の一例といえる。この事件は、金曜礼拝の場において飲酒や豚肉食等の悪癖が批判されたことをうけ、翌週になると肉屋の店頭から豚肉（ハムなどの加工品も含めて）が消えたというものである。当局は、この事態を店主の自発的行為であるとしたが、実際には警官による脅しがあったとされている。いずれにせよ、この事件以降ボスニアではイスラーム的規範が復活しつつあるようである。

2. マケドニア人ムスリム

マケドニア地域に居住するスラヴ系ムスリムで、人口は約四万人。これは、宗教的帰属に関わらずマケドニア人であるとする政治的色

彩の強い概念で、旧ユーゴ時代の一九七〇年に成立した。このような政治的判断がなされた背景には、いわゆるマケドニア問題と後述するポマクとの関わりがある。マケドニアのスラヴ系ムスリムをポマクであると規定すると、それを根拠にブルガリアとの間に国境問題が生じるおそれがあるためである。

これら、旧ユーゴ地域のムスリムは、そのほとんどがスンナ派で、内戦前の統計では約二二五〇のモスクがあり、一五八八人のイマームがいた。

3. ポマク

スラヴ系言語（主にブルガリア語など）を母語とし、バルカン半島南部地域に居住しているスラヴ系ムスリムで、人口はブルガリアに約二五万人、ギリシアに約三万人、マケドニアに約四万人。マケドニアの約四万人というのは、前述のマケドニア人ムスリムのこと、ブルガリアではキリスト教徒のマケドニア人とポマクを区別している。ポマクの語源は定かではないが、古い時代に他者によってつけられた蔑称といわれている。第二次世界大戦後のブルガリアの百科事典では、ポマクを「イスラーム化したブルガリア人」と規定しているが、これは前述のマケドニア人ムスリムと同様に政治的色彩の強い解釈といえよう。なぜなら、一九世紀においてポマクはオスマン帝国の非正規兵としてブルガリアの民族解放運動を弾圧する役割を担っていたからである。また、露土戦争後、ブルガリア解放に反対する蜂起を起こしたことも知られている。それゆえ、一九世紀から二〇世紀にかけての戦争や住民交換によって、ムスリムとしてトルコ領に移住した者も相当数いた。そして、一九七〇年代にはジフコフ政権の下で行われた強制的な改名キャンペーンにより弾圧

をうけることになった。このブルガリア版創氏改名は、一九八〇年代のトルコ系住民に対する一連の強制的同化政策の先例となった。

現在、ポマクの多く居住している地域は、バルカン山脈西部のテヴェンを除くと、ブルガリア・トルコ・ギリシア・マケドニアの国境に近い地域である。このうち、ギリシアのポマクは、スラヴ系言語を母語とし、トルコ語の文字表記を用いている点が興味深い。

4. トルコ系ムスリム

オスマン帝国支配期に移住したトルコ人の子孫を指し、ブルガリアでは北東部と南部に約一〇〇万人がまとまって居住している。また、ブルガリア以外では、セルビア・コソヴォ・マケドニアにも居住している。彼らは、トルコ語を母語とする点で他のムスリムと区別され、自らもトルコ人としてのアイデンティティを持っている。

一九八四年一二月から翌年にブルガリア政府が展開したヴァズラジダネ（回復）キャンペーンは、こうしたトルコ系ムスリムのアイデンティティの根幹に関わる事件となった。ここでは、ポマクの時にも見られた創氏改名の他、モスクでの宗教活動の中止・モスクの破壊・イスラーム的習慣を遵守することへの弾圧・トルコ風の服装や公の場におけるトルコ語の禁止など日常生活の細部にいたるまでの同化が図られた。政府によれば、ブルガリアの「トルコ人」はオスマン帝国の支配下で強制的に宗教的・言語的にイスラーム化された「ブルガリア人」であり、これは失われた民族性の「回復」であるという。もちろん、このような見解は史的根拠に欠けるものであり、トルコ系住民の激しい抵抗運動にあった。アムネスティ・インターナショナルの報告によれば、一〇〇名以上の死者がトルコ系住民に出たといいい、わが国でも新聞の片隅にこれらの事件を報じた記

事が載った。また、トルコ政府もこの事態を憂慮し、両国は一時緊張した関係となった。

この事件は、八六年には表面上沈静化したように見えたが、八九年に再び表面化することとなった。この年の五月にブルガリア北部に広がったトルコ系住民の抗議行動に対して、ジフコフが「すべてのブルガリア人は自由に出国できる」という趣旨の演説を行い、これをうけてトルコ系住民が大量にトルコへ出国した。その数は、三〇万人といわれている。この演説自体は、同年五月に改正された旅券法をうけてのものともみることができ、改正法の施行が九月であったことを考えると、実質的な国外追放とみられることもできる。ところが、出国したトルコ系住民の多くが農業や食品加工業に従事していたため、この年のブルガリアでは収穫期に深刻な人手不足となり、それは翌年までの食糧不足につながっていった。

この年は、いわゆる東欧革命の年であり、改革の波がブルガリアにも及ぶと、一二月のジフコフ批判をうけて翌年以降トルコ系住民との和解が進められることとなった。

5. その他

アルバニアからコソヴォにかけて主に居住しているアルバニア人ムスリムは、九〇年代末のコソヴォ紛争の当事者（被害者）としてわれわれの記憶に新しい。また、意外に思われるかも知れないが、ブルガリアのロマ（ジプシー）もしくはその類語は蔑称としてヨーロッパでは現在使われない）は、その四分の三がムスリムであるという。さらに、タタール人やチェルケス人というアジア系の民族意識を持つムスリムがバルカンに居住している。

六、むすびにかえて

以上、バルカンにおけるイスラーム化の過程および現代におけるムスリムの状況を概観してきた。バルカンのムスリムといっても地域差が非常に大きく、今後は特定の地域に焦点を当てた通史的な報告をする必要があると考えている。昨年の同時多発テロ以降、少なくとも日米両国においては、イスラームに対するマイナスのイメージが広がっている。本稿が他文化との接触と交流から共生にいたる過程や安易なナショナリズムが孕んでいる危険性などを生徒と共に考える切り口となるなら、筆者としてこれ以上の幸いはない。また、紙面の制約があるとはいえ、論旨が不明瞭であったり、時系列に沿った展開が不十分である点などの不備は、ひとえに筆者の力量不足によるものであり、読者諸氏のご教示をお願いしたい。

〈参考文献〉

- 芦田 均『バルカン』 岩波新書 一九三九(新装版一九九二)
柴宜弘編『もっと知りたいユーゴスラヴィア』弘文堂 一九九一
ドーニャ、フアイン著、佐原・柳田・山崎訳『ボスニア・ヘルツェゴビナ史―多民族国家の試練』恒文社 一九九五
永田雄三、羽田正『成熟のイスラーム社会』(世界の歴史一五) 中央公論社 一九九八
柴宜弘編『バルカン史』(世界各国史一八) 山川出版社 一九九八
鈴木 董『オスマン帝国の解体―文化世界と国民国家』 ちくま新書 二〇〇〇

鈴木 董「バルカン史におけるオスマン朝史料の意義」

『東欧史研究』第一二二号 一九八九

木村 真「ブルガリア歴史紀行―ブルガリア滞在記(二)」

―ブルガリアの改革とトルコ系住民問題』『歴史と地理』

四四七号

山川出版社 一九九二

木村 真「ブルガリア歴史紀行―ブルガリア滞在記(二)」

―国境を越えて』『歴史と地理』四四七号

山川出版社 一九九二

佐原徹哉「東南欧の政治と宗教」

『東欧史研究』第一八号 一九九五

木村 真「ブルガリア語を母語とするイスラム教徒―ポマク」

『歴史と地理』四八五号

山川出版社 一九九六

田中一生「『バルカン史』を読む」

『東欧史研究』第二二二号 二〇〇〇

『東欧を知る辞典』

平凡社 一九九三